

石田元季君著「俳文學考説」に對する授賞審査要旨

本書は俳文學に關係する大小二十篇内外の考説を集成したるものなるが、之を大別して一般俳諧史と尾張俳諧史との二部となし得へし。

第一部の一般俳諧史には最初に「鍛へられた文藝」の題下に芭蕉は貞門の興言利口、談林の飄逸哄笑、共に一時流行の姿にして別に不易のもの存することを認め、西行の和歌、宗祇の連歌、雪舟の繪、利休の茶に貫道する物を承けてサビの文藝に一世を送れり、しかも「彼は近代初頭學問興隆の機運に會し和漢の古典と歌詩とに親しむを得、三教一致思想の感化を受け、道義の學の啓沃に浴し、武士道を尙ぶ雰圍氣の間に長じ、やがて禪策苦練の鉗鎚を經」て發せられたる吟藻が、その本質に於て表現に於て特異性を有するは當然の事にして、蕉風俳諧はサビの文藝中にありて最も鍛へられたるものの一なることを實例に徴して論證し、次に「蕉風とその流移」と題して、芭蕉の俳諧はそれ自身古典的一完成にして門葉の何人も補整を企て得ざる程の完成なることを説き、元祿より天保に至る俳諧の推移變遷を通觀して、その盛衰隆替は祖翁の精神と交感響應の程度性質に因る所以を論じ、芭蕉の如き孤高獨特の俳境は彼の如く幅と深みと香りとを持つ修養・體驗・鍛練の後、彼の如く眞實味を詩境の中核とし、彼の如く匠氣・術氣・霸氣・俗氣に遠くして操持に堅き者にあらざればよく歩武を續ぐ能

はずと論結せり。

以上二篇は第一部一般俳諧史の總論序説とも見做すべきものにして、以下芭蕉の紀行文五篇を解説品評し、特に最後の一篇には「奥の細道を語る」の一章を設けて、その主要語句を抽出して精到明快なる評釋を施せり。

かくて元祿期を終り、俳諧中興期の諸家、文化文政期の俳風、天保期の俳風の各題下に代表的作家を擧げてその特色傾向を解説辨明し、次に俳文概説と題して貞門時代より近世末期に至る俳文の變遷を説き、一般俳諧史に關する記述を終る。

第二部尾張俳諧史は名古屋・熱田・鳴海を淵藪としてその展開の情勢を説き、一般俳諧史との交渉を明かにせり、此の地方は著者多年居住の地たるより博訪旁求漏らす所なく、新資料の發見少からず、殆ど獨擅場の觀あり、殊に名古屋の部は古風俳人、蕉門七部集初三集の主要作家、享保期の俳風の三題目を設けて委曲を盡せり。就中古風俳人の一章は從來人の多く言及せざる所にて著者闡幽の功を多とすべく享保期の俳風亦歴々之を掌に指すが如し。

以上列擧せる主要題目以外に謠曲と俳曲との關係を語る五六の小篇、也有的作と誤傳せられたる無夜食談、曉臺の書簡及び二條家俳諧、芭蕉の屢々宿泊したる鳴海の名家下郷知足の日記の紹介等、いづれも珍稀なる資料にして俳文學研究に資益する所少からず。

之を要するに本書は最初より一部の俳諧史として起草せられたるものにあらずして、種々の論考を集成したるものなれば俳諧史としては多少不備の點なきに非ざるも、著者はその排列に意を用ひ、前後の聯絡自ら備はり、相呼應して一般俳諧史・尾張俳諧史として能く錯雜紛糾せる史實を整理し、しかも概括的に過ぎて隱微なる動向を忘るゝ粗大の弊に陥らず、細心大觀綱目並び舉り優秀なる成果を收め得たる著者の豊富なる學力と洗練せられたる説述とは推賞に値するものと認む。